

関西支部フォーラム「人種・民族」要旨

『自由を求めた千マイルの逃走』と人種／階級／ジェンダーへの問い

中村善雄

2019年に映画『ハリエット』が公開され、バイデン政権下にて新20ドル札へのハリエット・タブマンの肖像起用計画が再始動し、地下鉄道に対する注目は高まっているが、夫であるウィリアムと共に北部へ脱出したエレン・クラフトに関する研究は意外なほど少ない。しかし、夫妻の共著である『自由を求めた千マイルの逃走』に記されたエレンの逃避行は劇的かつスリリングで、ウィリアム・ウェルズ・ブラウンらが主宰した反奴隷制集会ではエレンは自らの「白い」身体を1つのスペクタクルとし、活況を呈した。その後、彼女は夫と共に渡英後も奴隷制廃止運動のアイコンとして持て囃されたが、本発表においては、逃亡に際してのエレンの能動的パフォーマンスと、その後の沈黙の静的パフォーマンスを通して、彼女が人種や階級やジェンダー規範に投げかけた諸問題を検討してみたい。

ジョン・スタインベックの作品から人種および民族に関するテーマに切り込む

山内圭

ジョン・スタインベック(John Steinbeck, 1902-1968)は、ドイツ系の父親と北アイルランド系の母親の間にカリフォルニア州サリーナスに生まれた。1900年代初頭、カリフォルニア州サリーナス(Salinas)には日系人をはじめとするアジア系労働者もいたので、スタインベックの少年時代を描いた作品には日系人が登場する。他にもスタインベックの作品には、例えば『トーティーヤ・フラット』(*Torrilla Flat*, 1935)などには、パイサーノ(Pisano)と呼ばれるメキシコ系やネイティブアメリカン系の混血の人々が登場するとともにカリフォルニアに住む多様な民族の登場人物が描かれる。また『怒りのぶどう』(*The Grapes of Wrath*, 1939)に描かれるネイティブアメリカンの人物、『チャーリーとの旅』(*Travels with Charley*, 1962)で述べられるニューオーリンズにおけるアフリカ系アメリカ人への差別の様子、メキシコを舞台にした『真珠』(*The Pearl*, 1947)などの作品など、20世紀の前半から半ばまでのアメリカおよびその周辺を描いたスタインベック文学の中から時間の許す限り、人種および民族に関する話題につながる興味深いと思われる題材を提供したい。

「植物する」(plant doing)ということ：

ジョン・ウィンダム『トリフィドの日』を読む

遠藤 徹

これまで文学というものは人間を中心に語られてきた。その意味で焦点を人間からずらしていく傾向があるSFは傍流のそしりを受けてきたわけである。しかし、SDGsが盛んに喧伝される現在においては、むしろそうした文学の人間中心主義こそが糾弾されるべきなのではないだろうか。

本発表では、「怪奇植物トリフィドが人間を襲う」という構図で語られてきた物語を、植物というサバルタン、「究極の労働者階級」の視点から語りなおすということを試みたいと思う。

19世紀アメリカ文学にみる黒人奴隸法とその源流

深谷 格

19世紀アメリカ文学、とりわけ、『アンクル・トムの小屋』と『ハックルベリー・フィンの冒険』を素材に、小説の背景にある黒人奴隸法を検討する。前者は1852年に出版され、南北戦争前のアメリカ社会に大きな衝撃を与えた。後者は1884年に出版されたが、1830～1840年代のアメリカ社会を描いているといわれる。本報告では、これらの小説に描かれた、南北戦争前のルイジアナの黒人奴隸法を検討する。その際、かつてフランスの植民地であったルイジアナ州の黒人奴隸法に、フランスの黒人奴隸法が与えた影響を、小説に登場する具体的な問題（主に、奴隸の売買・婚姻・逃亡・解放）を素材に考察する。また、1848年までフランスの植民地には黒人奴隸制が存続していたことから、当時のアメリカにおける北部と南部の関係を、本国フランスと植民地の関係と対比することが可能ではないかと思われる。この南北問題についても考察の足掛かりを得たい。

牧師・マーティン・ルーサー・キング二世の「正義・平和・自由」についての一考察

浅野 献一

マーティン・ルーサー・キング二世(Martin Luther King Jr., 1929-68)は、アフリカ系アメリカ人の公民権運動の指導者として、最もよく知られている。

しかし彼は、組織や理念のために政治的に振舞う運動家ではなかった。特に、そのノーベル平和賞受賞後(1964年)から召天までの数年間は、ベトナム戦争反

対を表明し、公民権運動賛同者のつながりが絶ち切れていく中でも、その反戦の意志を貫いた。それは何よりも牧師として、またひとりのキリスト者として、聖書に基づく「良心」の姿勢であったと思われる。

その牧師キングの思想的根幹＝信仰、特に「正義(justice)・平和(peace)・自由(freedom)」などのキーワードの使い方と聖書の関連箇所・語句について、後期の説教を基にして、考察を行いたいと考えている。特に当時、批判の多くあったベトナム戦争に対するキングの思想・信仰を、説教から読み解いていきたいと願う。その際、先行研究をされていた梶原壽教授、またジェイムズ・H・コーン教授他、アフリカ系アメリカ人の宗教・信仰についても参考にしていくこととなるであろう。

自由が氾濫し、見えない戦争が吹聴される混迷する現代に、今一度、牧師キングの良心―「正義・平和・自由」から、確かな指針を学びゆきたいと考える。

イギリスの19世紀後半に見られるユダヤ人への理解

吉 田 一 穂

ヴィクトリア朝時代、ユダヤ人は反ユダヤ感情に基づいた差別に日々さらされていたが、反ユダヤ感情に基づいた差別は、イギリスにだけあったわけではなく、他のヨーロッパの国々にもあった。そのためユダヤ教からキリスト教へ改宗する人々もいた。

イギリスの19世紀前半において、ユダヤ人は後半と比べると不平等な扱いを受けていたと思われる。ユダヤ教の信仰を貫いた者たちは、依然として異端者の烙印を押されていた。社会の中では、宝飾品類の商売やあらゆる種類の中古品の商いはもとより、金融業界でもユダヤ人は大いに活躍していたが、ユダヤ人は、粗悪品や犯罪と関連づけられることもしばしばであり、平等には扱われていなかった。

しかしながら、19世紀後半になるとユダヤ人に対する不平等な扱いは、徐々に改善されていったと思われる。本発表においては、どのようにその改善がなされたかについて考えてみたい。